

排泄機能指導士における尿量モニタの有効性とその評価中間報告

土屋雅彦 特定非営利活動法人愛知排泄ケア研究会

排泄機能指導士

愛知県では、排泄ケアの知識と技術の向上を目的に、名古屋大学附属病院泌尿器科を中心に、2002年に特定非営利活動法人愛知排泄ケア研究会が発足した。介護・医療・その他一般の企業を中心とした活動で、2005年度現在で300名の会員数になった。一昨年度より、当研究会が認証する排泄機能指導士養成事業を開始、認定者の数が50名に到達。

排泄ケア現場における課題

排泄環境の改善とスタッフの意識向上が課題であり、これらを改善する為には、その実態把握と改善方法のスタンダード化(排泄管理マニュアル)が重要である。その中で排尿のパターンを把握することの重要性は、周知されつつある。しかし、実際には、その把握方法である紙おむつの重量を計測したり、排尿量をコップ等で測り、記録することは、現場職員や介護者にとっては、大きなストレスになり、継続することは非常に厳しい現実である。

尿量モニタ

昨年度、会員企業において尿量モニタが開発・発表された。これは、エコーによって膀胱内の尿量を測定できる機器で、排尿の前段階での膀胱内の尿量が把握でき、使い方によっては、排尿後の残尿の把握や1日の膀胱内の尿量の変化を追跡記録できる機器である。今回、この機器を利用し、前述の排尿日誌の実践に大きな可能性を予感する。

中間報告

今回、排泄機能指導士が所属する施設や在宅現場でモニタリングした。リハビリを中心とした病院・在宅現場における事例、また、特別擁護老人ホームなどでこの尿量モニタを利用し、尿失禁の原因の評価、或いは、オムツ利用者への排泄誘導のタイミングなどの有効活用などを、様々な立場から臨床評価し、介護予防をテーマにしたその有効性と将来性を専門家の方々にタイムリーに紹介する。